

◇ 5月の天文暦 ◇

日時	記	事
3 6	朔	
4 15	月	最近
6 1	立 夏	(太陽黄経 45°)
9 21	上 弦	
17 14	望	
19 23	月	最遠
20 17	水 星	外合
21 14	小 満	(太陽黄経 60°)
25 18	下 弦	
31 15	木 星	留

☆ 原点めぐり ☆

本 初 子 午 線

1884年にワシントン市で開かれた国際子午線会議では、旧グリニッジ天文台のエアリー (Airy) 子午儀の中心を通る子午線を本初子午線とし、この子午線に関する平均太陽時を世界時とすることを決議した。これより2年後の1886年 (明治19年)、わが国では勅令第19号が公布され、この子午線会議の結果に基づいて、東経 135°の子午線の時をわが国の標準時と定めた。

さてこの当時は、地球の自転軸の方向と、観測地点の鉛直線を含む平面、つまり子午面、は形状地球に対して固定しているものと考えられていた。この概念は数年後に早くも打ちくだかれた。1890年前後には緯度変化および極運動が確認され、地球の自転軸は形状地球に対して不動でないことが判ったからである。極運動からくる経度変化によって、この本初子午線に関する世界時もまた揺り動かされる。しかしこの経度変化の修正が、国際的

に正式に実施されるようになったのは1956年からである。結局、当時の平均的な本初子午線の採用経度 (0^h0^m0^s.020E) が基準となつて、各国天文台の当時の採用経度が次々と決められて来たことになる。

1957年には、王立グリニッジ天文台はこのグリニッジから、ロンドン南方約 50 km のハーストモンズーへ移転した。旧天文台はロンドン市中から東南東へ約 10 km、いまではグリニッジ公園となっている地域の一角にあり、天文博物館として保存されている。グリニッジからハーストモンズーへの移転に際しては、両地点の UT1 が連続するように、ハーストモンズーの PZT の採用経度が定められた。この際、両地点から 350 マイルの範囲にわたる重力異常の調査から、鉛直線偏差の値が得られた。旧グリニッジでのそれは 0°141E で、近傍の測地原点からみたエアリー子午儀の位置の天文経度は 0°161E であることが判った。

その後、国際報時局 (BIH) の下で、各天文台の採用経度値の全面改訂が、1962年および1968年の2回行なわれたが、いずれの場合にも平均的な本初子午面と赤道面との交線できまる経度原点を保存する方針がとられた。現在の世界時は、それぞれの採用経度に基づく各天文台の時刻観測の世界平均、平均天文台、から決められ、本初子午線との直接の関係はなくなっている。

写真は旧グリニッジ天文台エアリー子午儀の保存されている建物の南外壁で、本初子午線の標識が目に見えやすい。 (飯島重孝)

